高橋政代:網膜の機能再生を目指して. 学 術会議公開シンポジウムー感覚器機能障害 の克服一、東京、2004

(海外)

<u>Ishibashi T</u>: The Japanese AMD trial: a review of one-year results & two case histories. XXIIIrd Meeting of the Club Jules Gonin. Montreux, Switzerland, 2002

Miyazaki M, Ikeda Y, <u>Ishibashi T</u>, et al.: Simian lentivairal vector-mediated retinal gene transfer of pigment epithelium-derived factor protects retinal degeneration and electrical defect in Royal College of Surgeons rats. ARVO, Ft. Lauderdale, USA, 2003

<u>Tamai M</u>: Autologous cultured IPE transplantation in wet type AMD. Special Vision Club Lecture, Dean McGee Eye Institute, Oklahoma Medical Center Oklahoma City, 2004

Yanagi Y, Tamaki Y, Inoue Y, <u>Araie</u>

M:Growth and molecular properties of retinal progenitor cells from distinct portions of the retina • ARVO, Ft. Lauderdale, USA, 2004.

Ohji M, Sakaguchi H, Gomi F, <u>Tano Y</u>. Pneumatic displacement of submacular hemorrhage: Is TPA essential? XXIV Club Jules Gonin, Athens, Greece,2004

Sato A, Katai N, Shibuki H, Kukuchi T, Yoshimura N.

Characterization of gene expression changes in oxygen-induced retinopathy at the early stage

of retinal neovascularization. ARVO, Ft. Lauderdale, USA, 2004.

Ohguro H, Ohguro I, Mamiya K, Ishikawa F, Metoki T, Yamazaki H, Miyagawa Y, Takano Y, Ito T, Nakazawa M: Prolonged survival of the phosphorylated form of rhodopsin during dark adaptation of Royal College Surgeons rat.ARVO, Ft. Lauderdale, USA, 2004.

Nozaki M, Okabe K, Okabe J, <u>Ogura Y</u>: Intraocular pharmacokinetics of triamcinolone acetonide after intravitreal and posterior sub-Tenon's capsule injections. ARVO, Fort Lauderdale, USA, 2004

<u>Yuzawa M</u>: Transpupillary thermotheraphy (Symposium: Current non-surgical management of exudative age-related macular degeneration), 29th International Congress Of Ophthalmology, Sydney ,Australia,2002.

Shiraga F. Combined transpupillary thermotherapy and posterior sub-Tenon's injection of triamcinolone acetonide for subfoveal choroidal neovascularization. The 27th Annual Meeting of the Macula Society, Las Vegas, USA 2004

Miyake Y, Kondo H, <u>Terasaki H</u>: Analysis of waveforms of focal macular ergs in 2939 patients with macular diseases. The 24th Meeting of the Club Jules Gonin, Athens, Greece, 2004

Sonoda S, Uchino E, Sakamoto T.

Sonoporation-mediated gene transfer to the eye. 2. 実用新案登録 ARVO Ft. Lauderdale, USA,2004

Takahashi M.: Adult iris cells and ES cells as sources of retinal transplantation. ARVO 3. その他 Minisymposium, Florida, USA,2004

1件

- ・硝子体手術用コンタクトレンズ補助リン グ(14年5月)

なし

- H. 知的所有権の出願・登録状況
- 1. 特許取得

7件

- ・「磁性ナノ微粒子を用いたバイオター ゲティング」(16年国際特許申請中)
- ・「光干渉断層計による厚みのリング状表示、 および眼底写真の重ね合わせ」(16年特許 申請中)
- ・「遺伝子導入方法及び薬剤導入方法」 (現在公開中:公開番号・特開 2001-37476)
- ・「水晶体細胞の作成方法、およびこの方法 によって得られる水晶体細胞」 (特許出願:出願番号 特願 2003-96002) (PCT 出願: 国際出願番号
- · Low Vision Evaluator | (Patent No US6802608B1)
- ・「希少糖の生理活性作用の利用方法および 希少糖を配合した組成物」 2003年5月22日特許出願 (整理番号: PCT-03-R S01)
- その他1件

PCT/JP2004/003848)

-- 12 --

Ⅲ. 分担研究報告

1. 東北大学における網膜色素変性の実態調査~中間報告~

渡辺亜希 ¹⁾、和田裕子 ¹⁾、板橋俊孝 ¹⁾、佐藤 肇 ¹⁾、川村后幸 ¹⁾、遠藤麻衣 ¹⁾
多田麻子 ¹⁾、玉井 信 ¹⁾、大森 芳 ²⁾、辻 一郎 ²⁾
(¹⁾ 東北大、²⁾ 東北大公衆衛生学)

研究要旨 我々は、網膜色素変性の予後決定に関する因子を調査するため 2004 年 4 月から 12 月まで東北大学眼科外来を受診した網膜色素変性患者 143 名に臨床調査を行った。調査項目は、夜盲・視野狭窄・視力低下を自覚した時期、遺伝形式、白内障の有無、眼底所見、網膜電位図、ゴールドマン動的量的視野検査、薬物治療の有無を調査、心理状況を調べるために POMS (Profile Of Mood States) を施行した。結果、初発症状は夜盲の自覚が先行し、常染色体優性遺伝患者が比較的早期に自覚をしていた。これは、遺伝形式から病気に対する知識の加味も考えられた。POMS (Profile Of Mood States) により患者のストレス・心理状況を調査してみると、網膜色素変性の患者では健常人に比べ鬱症状が強く活気が少ないことが判明した。また 50 歳代女性および 60 歳代男女では比較的情動の変化が少ないことがわかり、病名告知からの時期との関与も示唆された。

A. 研究目的

網膜色素変性は表現型の多様性がみられる 疾患である。その進展速度も遺伝形式、同 一家系内でもさまざまである。我々は、病 気の進行を促進する因子を解明していく一 環として、予後決定因子に関する疫学研究 および実態調査を施行した。今回はその中 間報告を行う。

B. 研究方法

2004年4月から11月までに東北大学眼科を受診し臨床調査に同意が得られた患者143人(男性68名、女性75名)、年齢13~77歳(平均44歳)。

上記対象に対し 夜盲・視野狭窄・視力低 下を自覚した時期、遺伝形式、白内障の有 無、眼底所見、網膜電位図、ゴールドマン 動的量的視野検査、薬物治療の有無を調査、 患者の気分・心理状況を調べるためにPO MS (Profile Of Mood States) を施行した。
1)

C. 研究結果

遺伝形式別では、常染色体優性遺伝が 42 名 (29.3%)、常染色体劣性遺伝 19 名 (13.3%)、X染色体劣性遺伝 2 名 (1%)、 弧発例 69 名 (48.2%) であった。夜盲を自 覚している人は 126 名と全体の 9割近くで あり、この自覚時期の平均年齢は常染色体 優性遺伝で 18.7 歳と最年少、常染色体劣性 遺伝で20.6 歳、弧発例で26.5 歳であった。 初診時に白内障を有したものは 108 眼 (38%) であったが 2004 年には 161 眼 (56%) であった。 眼底所見では、骨小体 様色素沈着を有する患者は初診時59名(4 1%)が 2004 年には 123名 (86%)、黄斑 浮腫は初診時 8 名 (5.6%) が 2004 年には 20 名 (14%)、視神経萎縮は初診時 1 眼 (0.6%) が 2004 年では 8 眼 (5.6%) であった。網膜電位図 (ERG) で初診時 non recordable だったのは 44 名 (30%)、ゴールドマン視野検査で正常範囲を示したのは V-4-e で 32 名 (11.6%)、I-4-e で 2 名 (0.7%)、I-2-e では 0 名であった。 2)

投薬状況は、ヘレニエン投与者 44名(30%)、 ビタミンAおよびビタミンAを含むサプリ メント服用者は 28名(19.6%) であった。 <POMS結果>

全年齢層で、健常人より Depression の値が高く、19歳以下の女性を除いて Vigor が低値であった。男性では特に 20歳代の Depression の値が高く、50歳代の Vigor の低下が顕著であった。女性では 20歳代の AngerーHostility、30歳代の Confusionが高値であり、50歳代女性および 60歳以上男女では比較的健常人と並行する穏やかな波形となった。(図1、図2)

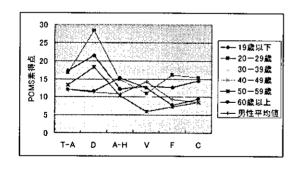


図1 男性年代別 POMS 結果

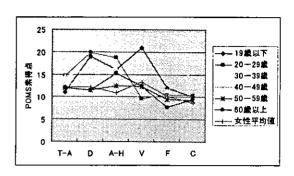


図2. 女性年代別 POMS 結果

D. 考察

実態調査の結果、初発症状は夜盲の自覚が 先行し、さらに常染色体優性遺伝患者では 比較的早期に夜盲を自覚していることが判 明した。これは同じ病気の近親者がいるこ とで、網膜色素変性に対する知識が関与し ていることが示唆された。視力の低下自体 は個々様々であり、遺伝形式ごとの有意差 を見出すことはできなかった。

薬物療法に関しては、当科では経過観察のみを施行している例が半数以上であった。POMSの結果、網膜色素変性の患者全般に鬱傾向が強いと言えるが、治療法のない進行性の病気であることから、病名告知から日が浅い若年患者や鬱世代である壮年男性に顕著に現れたと言える。50歳代女性および60歳代男女の波形は比較的穏やかであったが、病名告知から年月を経ることで、残された視機能に対して受容の境地が勝っているとも考えられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

- H. 知的財産権の出願・登録状況
- 1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

1. 参考文献

- 1. 横山和仁、荒記俊一: 日本版 POMS 手引、 東京: 金子書房、2003
- McNair DM, Lorr M, Droppleman
 LF: Profile of
 Mood States. San Diego: Educational
 and Industrial Testing Service, 1992.
- 3. WelberRG, ToblerWR.

 Computerized quantitative
 analysis of kinetic visual field. AmJ
 Ophthalmol. 101:461-468, 1986.

2. 遺伝性網膜変性疾患の遺伝子解析と遺伝子異常をもつ症例の 臨床像の検討 〜東北大学におけるまとめ〜

和田裕子、板橋俊隆、佐藤 肇、川村后幸、多田麻子、遠藤麻衣、玉井 信 (東北大)

研究要旨 1990 年に、ロドプシン遺伝子の点突然変異が常染色体優性網膜色素変性を起こす事が報告されて以来、遺伝性網膜変性疾患に関して、遺伝子異常と臨床像の報告が国内外から多数行われている。我々は1999 年より、東北大学眼科で登録されている遺伝性網膜変性疾患患者に対して遺伝子解析を施行し、遺伝子変異と臨床像について臨床眼科"眼と遺伝病"で報告してきた。今回は6年間の遺伝子解析の結果と臨床像について報告する。遺伝性網膜変性疾患541家系を対象とし、各疾患ごとに原因遺伝子をスクリーニングした。常染色体劣性網膜色素変性、Leber 先天盲、Usher 症候群に関しては原因遺伝子変異を確認できたのは10%以下であった。一方、若年性網膜分離症、眼底白点症、クリスタリン網膜症、小口病、ノリエ病に関してはほぼ100%に変異を確認し、遺伝子診断が有用である事が判明した。さらにクリスタリン網膜症、小口病、眼底白点症に関しては日本人高頻度変異が存在するために、遺伝子解析へのアプローチが容易であると考えた。網膜色素変性へ遺伝的異質性に富み、日本人の主要な原因遺伝子解明のため、連鎖解析を用いたアプローチが必要になると考えられた。

A. 研究目的

網膜色素変性をはじめとする遺伝性網膜変性疾患に対して遺伝子解析が国内外で施行され遺伝子変異と臨床像が蓄積されている。我々は、1999年9月より現在に至るまで、臨床眼科 "眼と遺伝病"で遺伝子解析結果と、臨床像の報告を行ってきた。今回の研究目的は、我々が施行した遺伝子解析のまとめを示し、遺伝性網膜変性疾患における遺伝子解析の意義と遺伝子変異が引き起こす臨床像について詳細に検討する事である。

B. 研究方法

東北大学眼科を受診し、遺伝子解析に同意 が得られた遺伝性網膜変性疾患 541 家系を 対象とした。(図1)

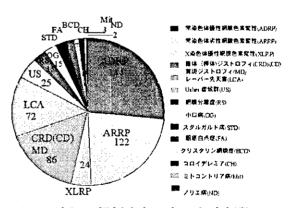


図1 遺伝子解析をおこなった症例数

症例の末梢血より DNA を抽出し、Rhodopsin,, Peripherin/RDS, FSCN2, RP1, HPRP3, PRPF31, NRL, PRPC8, CA4, IMPDH1, RPGR, RP2, CRX, RPE65, GUCY2D, AIPL1, RDH12, CYP4V2, ABCA4, RS1, ND, Rep-1, Arrestin, RDH5, MERTK, の全ての

エクソンについてプライマーをデザインし、 PCR-Direct sequence 法を用いてスクリー ニングを施行した。

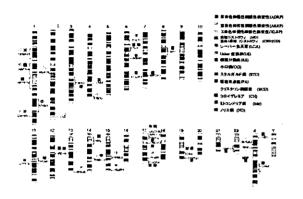


図2 対象とした遺伝子

C. 研究結果

網膜分離症、小口病、眼底白点症、クリスタリン網膜症に関しては、ほぼ100%に原因遺伝子変異を確認した、一方、網膜色素変性、錐体桿体ジストロフィ、Usher症候群、Leber 先天盲の症例では原因遺伝子変異を確認できない症例が大多数であった。またFSCN2、RDH5、HPRP3、IMPDH1、CYP4V2、Arrestin遺伝子は日本人患者の変異のホットスポットが存在した。1)-6)

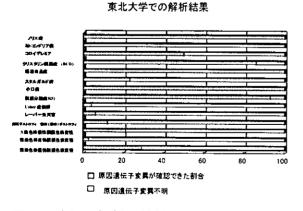


図3 遺伝子解析の結果

D. 考察

網膜色素変性は、遺伝的異質性に富み、遺伝子変異から臨床像を、臨床像から遺伝子変異を端的に解明する事は不可能である。 さらに海外の報告と遺伝子変異の種類、頻度は日本人患者では大きな違いが認められる。

眼底白点症、小口病、クリスタリン網膜症、 網膜分離症では遺伝子解析を行う事で診断 が確定できる。今後は、未知の原因遺伝子 を解明するために日本人患者における連鎖 解析が必要になると思われる。

E. 結論

網膜色素変性の症例では遺伝子変異の解明 は低頻度であった。今後は日本の多施設で 各疾患を分類して効率的にスクリーニング を行う事が必要になると思われる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- Wada Y, Tada A, Itabashi T, Kawamura M, Sato H, Tamai M. Screening for mutations in the IMPDH1 gene in Japanese patients with autosomal dominant retinitis pigmentosa. Am J Ophthalmol, (in press)
- Wada Y, et al. Screening for Mutations in CYP4V2 Gene in Japanese Patients With Bietti's Crystalline Corneoretinal Dystrophy. Am J Ophthalmol (in press)
- 3. Wada Y, Itabashi T, Sato H, Tamai M. Clinical features of a Japanese family

with autosomal dominant retinitis pigmentosa associated with a Thr494Met mutation in the HPRP3 gene.Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol.;242,956-961,2004.

Kawamura M, Wada Y, Noda Y,
 Itabashi T, Ogawa S, Sato H, Tanaka K,
 Ishibashi T, Tamai M.Novel
 2336-2337delCT mutation in RP1 gene
 in a Japanese family with autosomal
 dominant retinitis pigmentosa. Am J
 Ophthalmol, 137: 1137-1139, 2004.

2. 学会発表

- 和田裕子 他「クリスタリン網膜症の CYP4V2 遺伝子変異検索」第 58 回日本 臨床眼科学会(2004 年 11 月)
- 2. Wada Y, Sato H., Itabashi T.,
 Kawamura M., Noda Y., Nakamura M,
 Ishibashi T, Tamai M.
 Prevalence of Mutations in Nine
 Candidate Genes in Japanese Patients
 with Autosomal Dominant Retinitis
 Pigmentosa XI INTERNATIONAL
 SYMPOSIUMONRETINAL
 DEGENERATION, Perth
- H. 知的財産権の出願・登録状況
- 1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

1. 参考文献

- Nakazawa M, Wada Y, Fuchs S, Gal A, and Tamai M. Oguchi disease: Phenotypiccharacteristics of patients with the frequent 1147delA mutation in the arrestin gene. Retina 17:17-22,1997.
- Wada Y, Abe T, Takeshita T, Sato T, Tamai M. Mutation of human retinal fascin gene (FSCN2) causes autosomal dominant retinitis pigmentosa. Invest Ophthalmol Vis Sci;42:2395-2410,2001.
- 3. Wada Y, Abe T, Sato H, Tamai M. A
 Novel Gly35Ser Mutation in the RDH5
 Gene in a Japanese Family with
 Fundus albipunctatus Associated with
 Cone Dystrophy. Arch Ophthalmol;119:
 1059-1063,2001.
- 4. Chakarova CF, Hims MM, Bolz H, et al. Mutations in HPRP3, a third member of pre-mRNA splicing factor genes, implicated in autosomal dominant retinitis pigmentosa. Hum Mol Genet;11:87-92,2002.
- 5. RetNet. Available at,
 http://www.sph.uth.tmc.edu/Retnet/disease.htm
- 6. Wada Y, Tada A, Itabashi T, Kawamura M, Sato H, Tamai M.Screening for mutations in the IMPDH1 gene in Japanese patients with autosomal dominant retinitis pigmentosa. Am J Ophthalmol, (in press)

century to treat urinary tract infections and is currently recommended for the treatment and prophylaxis of cystitis.^{1,2} Uva ursi contains arbutin, which is cleaved and conjugated to form hydroquinones, which are known inhibitors of tyrosine kinase and thus melanin synthesis. These agents are marketed in topical form as whitening creams, and uva ursi is known to cause depigmentation.³ Tyrosine kinase is a ubiquitous enzyme whose structure and function is preserved in the retinal pigment epithelium and choroidal melanocytes. Since melanin is present in these ocular layers, ingestion of uva ursi may alter melanin metabolism with secondary visual effects.

This patient demonstrated a constellation of findings including a bull's-eye maculopathy, paracentral scotomas with a decrease in sensitivity, reduction in electroretinography (ERG) amplitude, and retinal thinning on OCT. Paracentral scotomas are an early manifestation of toxicity in patients with chloroquine and hydroxychloroquine toxicity.⁴ In the early stages of these disorders the ERG can be normal, although patients can develop a decrease in ERG amplitude later accompanied by an increase in latency.⁴ Use of a multifocal ERG can detect abnormalities at an early stage.⁵ Since toxicity develops in the retinal pigment epithelium and outer retina, the OCT changes we observed are likely attributable to thinning of the outer retina although we cannot discern this directly because of limitation of instrument resolution.

While several cases of acute quinone toxicity have been documented, there have not been any case reports of ocular toxicity from chronic quinone use. Other drugs such as chloroquine and hydroxychloroquine, which differ in chemical structure from quinones, are known to cause bull's-eye maculopathy. The maculopathy described in this patient was suspected to result from ingestion of the herbal supplement uva ursi on the basis of its ability to inhibit melanin synthesis. It is important for ophthalmologists to obtain a complete history when evaluating patients with retinal dysfunction, including eliciting a history of herbal supplement use.

REFERENCES

- 1. Yarnell E. Botanical medicines for the urinary tract. World J Urol 2002;20:285–293.
- Larsson B, Jonasson A, Pianu S. Prophylactic effect of UVA E in women with recurrent cystitis: A preliminary report. Curr Ther Res Clin Exp 1993;53:441–443.
- 3. Matsuda H, Higashino M, Nakai Y, Iinuma M, Kubo M, Lang FA. Studies of cuticle drugs from natural sources. IV. Inhibitory effects of some *Arctostaphylos* plants on melanin biosynthesis. Biol Pharm Bull 1996;19:153–156.
- Bernstein HN. Ophthalmologic considerations and testing in patients receiving long-term antimalarial therapy. Am J Med 1983;75:25–34.
- Penrose PJ, Tzekov RT, Sutter EE. Multifocal electroretinography evaluation for early detection of retinal dysfunction in patients taking hydroxychloroquine. Retina 2003;23:503–512.

Novel 2336-2337delCT Mutation in RP1 Gene in a Japanese Family With Autosomal Dominant Retinitis Pigmentosa

Miyuki Kawamura, MD, Yuko Wada, MD, Yoshihiro Noda, MD, Toshitaka Itabashi, MD, Soh-Ichiro Ogawa, MD, Hajime Sato, MD, Kenji Tanaka, MD, Tasturo Ishibashi, MD, and Makoto Tamai, MD

PURPOSE: To determine the frequency and kinds of mutations in the RP1 gene, and to characterize the clinical features of a Japanese family with autosomal dominant retinitis pigmentosa (ADRP) with a novel 2336 to 2337delCT mutation in the RP1 gene.

DESIGN: Case reports and results of DNA analysis.

METHODS: Mutational screening by direct sequencing was performed on 96 unrelated patients with ADRP. The clinical features were determined by complete ophthalmologic examinations.

RESULTS: A novel 2336 to 2337delCT mutation in the RP1 gene was identified in two patients from a Japanese family with ADRP. In addition, three families with ADRP carried a previously reported nonpathogenic Arg1933X mutation. The ophthalmic findings with a 2336 to 2337delCT mutation were similar to those of typical retinitis pigmentosa with rapid progression after age 40 years.

CONCLUSIONS: The most common Arg677X mutation in the white population was not found in the Japanese population; instead a novel mutation was found. (Am J Ophthalmol 2004;137:1137-1139. © 2004 by Elsevier Inc. All rights reserved.)

N 1999, TWO GROUPS REPORTED ON A FOURTH GENE, THE RP1 gene, that was associated with autosomal dominant retinitis pigmentosa (ADRP), and that it was located on chromosome 8q12 with four exons. 1.2 This gene probably plays a role in the regulation of the retinal oxygen levels, and might be involved in photoreceptor metabolism and development.

Accepted for publication Dec 16, 2003.

From the Department of Ophthalmology, Tohoku University School of Medicine, Sendai, Japan; Department of Ophthalmology, Kyushu University School of Medicine, Fukuoka, Japan; and Ganaka Tanaka Clinic, Wakavama. Japan.

This study was supported, in part, by a grant from the Research Committee on Chorioretinal Degenerations and Optic Atrophy, the Ministry of Health, Labour and Welfare of the Japanese Government (T. Ishibashi), Tokyo, Japan, and a Grant-In-Aid for Scientific Research from the Ministry of Education, Science, and Culture of the Japanese Government (Y.W., A-14704044), Tokyo, Japan.

Inquiries to Yuko Wada, MD, Department of Ophthalmology, Tohoku University School of Medicine, 1-1 Seiryo-machi, Aoba-ku, Sendai 980-77, Japan; fax: +81-22-717-7298; e-mail: YUKOW@oph.med. tohoku.ac.jp

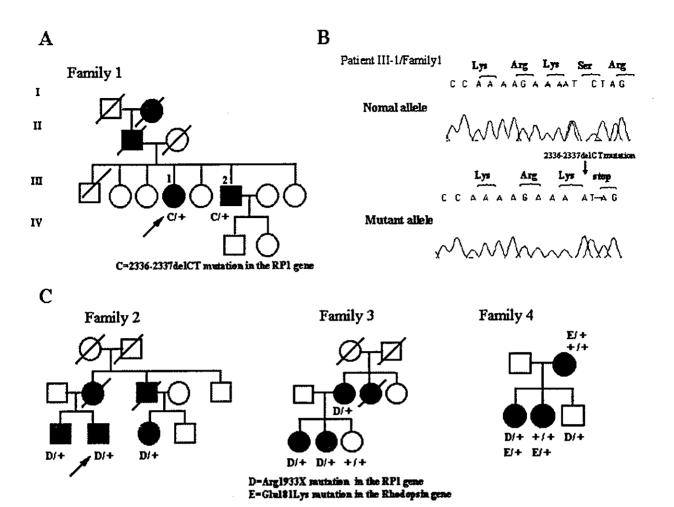


FIGURE 1. (A) Pedigree of a Japanese family with autosomal dominant retinitis pigmentosa associated with the 2336 to 2337delCT mutation in the RP1 gene. The affected (solid symbols) and unaffected (open symbols) members are shown. Arrow = proband; circles = female members; slash = deceased; squares = male members; X = individuals examined in this study; + = normal allele. (B) Results of nucleotide sequencing analysis. Family 1 has a 2336 to 2337delCT mutation. The upper sequence is the normal allele, and the lower sequence is the mutant allele from patient III-1. (C) Pedigrees of three Japanese families with Arg1933X mutation.

All of the reported mutations in the RP1 gene led to a premature termination, and most were located between codon 500 and 1053, especially within 663 to 777.^{1–5} Among the pathogenic mutations, the most common mutation, Arg677X, was present in approximately 3% to 4% patients with ADRP in the United States, and this mutation is the third most common ADRP mutation.

To determine if mutations in the RP1 gene were present in the Japanese population, 96 genomic DNA samples from 96 unrelated patients with ADRP were screened. Informed consent was obtained from all patients after an explanation of the purpose of this study and the procedures to be performed.

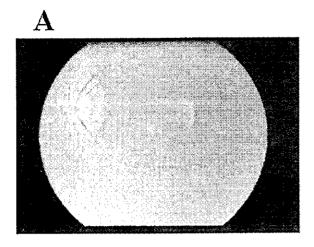
Twenty-one sets of primer pairs were employed to cover the entire coding region in the RP1 gene for direct sequencing with an ABI sequencer (model 3100) (Applied Biosystems, Foster City, California, USA). The results of mutational screenings demonstrated that Japanese patients did not have the common Arg677X mutation; instead, two members from one family with ADRP were found to have a 2336 to 2337delCT mutation, and three unrelated families with ADRP had an Arg1933X mutation in the RP1 gene (Figure 1).

For the heterozygous 2336 to 2337delCT mutation, the amplified DNA fragments were subcloned using pGEM to confirm this mutation. Ten subcloned polymerase chain reaction products were then sequenced. The novel 2336 to 2337delCT mutation resulted in a frame shift and premature termination at the next codon.

The Arg1933X mutation was reported to be nonpathogenic in Chinese patients despite its stop codon, because it was detected in one normal control, a patient with Stargardt disease, and his two relatives.⁵ In our cases, this mutation segregated with the phenotype from two unre-

AMERICAN JOURNAL OF OPHTHALMOLOGY

JUNE 2004



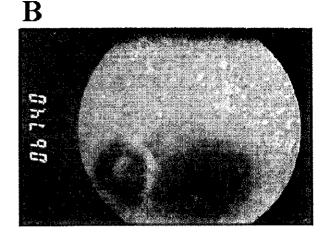


FIGURE 2. Fundus photographs of patient III-2 of family 1. The mottled appearance of the retinal pigment epithelium, attenuated retinal vessels, and edematous macula can be seen bilaterally. (A) Fluorescein angiogram of patient III-2 of family 1 shows granular hyperfluorescence from the posterior pole to the midperipheral area.

lated families with ADRP, and one family was also found to have a rhodopsin mutation (Figure 1). The Arg1933X mutation has not been detected in the white population, and these findings suggest that this mutation has a common sequence variant in Japanese and Chinese people.

The clinical features of the two affected members (68 and 64 years old) with the 2336 to 2337delCT mutation were typical of patients with retinitis pigmentosa. Both patients had night blindness that was first noted at approximately age 40 years. Their visual acuity ranged from 0.02 to 0.3, and both noted visual disturbances after age 40 years with severe clinical features after age 50. These findings suggested that Japanese patients with the RP1 mutations have a rapid and progressive decline of visual functions after age 40.

Fundus examination disclosed bilateral pigmentary retinal degeneration, attenuation of the retinal arteries, and edematous macula (Figure 2).

The Pro23His and Pro347Leu mutations in the rhodopsin gene, the Arg677X mutation in the RP1 gene, and the Asp226Asn mutation in the IMPDH1 gene are representative mutations for ADRP, but the Arg677X in the RP1 gene and Asp226Asn mutation in the IMPDH1 gene have not been reported, and mutations in the rhodopsin gene are very rare in Japanese patients with ADRP. These findings support our hypothesis that the kinds and frequency of mutations depend on the ethnic population.

In conclusion, mutations in the RP1 gene are relatively rare in Japanese patients with ADRP; this mutation has been found in 1.6% of unrelated patients with ADRP.

REFERENCES

1. Sullivan LS, Heckenlively JR, Bowne SJ, et al. Mutations in a novel retina-specific gene cause autosomal dominant retinitis pigmentosa. Nat Genet 1999;22:255–259.

- Pierce EA, Quinn T, Meehan T, et al. Mutations in a gene encoding a new oxygen-regulated photoreceptor protein cause dominant retinitis pigmentosa. Nat Genet 1999;22:248–254.
- 3. Bowne SJ, Daiger SP, Hims MM, et al. Mutations in the RP1 gene causing autosomal dominant retinitis pigmentosa. Hum Mol Genet 1999;8:2121–2128.
- Berson EL, Grimsby JL, Adams SM, et al. Clinical features and mutations in patients with dominant retinitis pigmentosa-1 (RP1). Invest Ophthalmol Vis Sci 2001;42:2217–2224.
- Baum L, Chan WM, Yeung KY, et al. RP1 in Chinese: Eight novel variants and evidence that truncation of the extreme C-terminal does not cause retinitis pigmentosa. Hum Mutat 2001;17:436.

Optical Coherence Tomography Findings in Patients With Late Solar Retinopathy

Rodrigo Jorge, MD, PhD, Rogério A. Costa, MD, PhD, Luciana S. Quirino, MD, Milla W. Paques, MD, Daniela Calucci, COMT, José A. Cardillo, MD, and Ingrid U. Scott, MD, MPH

PURPOSE: To investigate the morphologic appearance on optical coherence tomography (OCT) of the macula in

Accepted for publication Dec 9, 2003.

From the Retina and Vitreous Section, Ribeirão Preto School of Medicine, University of São Paulo, Ribeirão Preto, São Paulo, Brazil; Unidade de Diagnóstico Avançado e Tratamento em Oftalmologia, Consultores de Retina e Associados — Araraquara, São Paulo, Brazil; and Department of Ophthalmology, Bascom Palmer Eye Institute, University of Miami School of Medicine, Miami, Florida.

Inquiries to Rogério A. Costa, MD, PhD, Rua Italia 1905 apto 74, Araraquara—SP 14801-350 Brazil; fax: 55(16)-3331-1001; e-mail: roger.retina@globo.com

VOL. 137, NO. 6

BRIEF REPORTS

1139

TABLE 1. Baseline Examination and Study Examination Findings in Patients With Solar Retinopathy

	Patient 1	Patient 2	Patient 3	Patient 4
Baseline examination				
Age (yr), gender, study eye	42, F, RE	16, F, RE	15, F, RE	28, F, LE
Date of presenting examination	November 2000	March 2003	December 2002	June 2002
Past medical history	Sun gazing since childhood	Gazing at the sun and at fluorescent lights	Sun gazing	Sun gazing
BCVA, study eye	20/60	20/20	20/20	20/25-2
Study examination			•	
Period from baseline	32 mo	4 mo	7 mo	12 mo
BCVA, study eye	20/60	20/20	20/20	20/20
Amsler grid	Central metamorphopsia	Central metamorphopsia	Central metamorphopsia	Unremarkable
Macular findings	Small reddish spot	Mild RPE mottling	Small yellowish dot	Mild RPE mottling
Fluorescein angiography	Unremarkable	Unremarkable	Unremarkable	Unremarkable
Optical coherence tomography				
Photoreceptor outer segments	Absence of signal	Absence of signal	Absence of signal	Fragmentation/fusion
Inner high reflective layer	Interruption	Interruption	Small breaks	Fragmentation/fusion
Photoreceptor inner segments	Absence of signal	Presence of signal	Presence of signal	Presence of signal

BCVA = best-corrected visual acuity; F = female; LE = left eye; RE = right eye; RPE = retinal pigment epithelium,

patients with late solar retinopathy and its association with visual acuity.

DESIGN: Observational case series.

METHODS: All patients with solar retinopathy evaluated between 1998 and 2003 at one institution were invited to participate in an ophthalmic evaluation.

RESULTS: In all four affected eyes of four patients, OCT demonstrated abnormal reflectivity at the outer foveal retina, such as fragmentation or interruption of the inner high reflective layer corresponding to the junction between the photoreceptor inner and outer segments. Involvement of the entire photoreceptor reflective layer at the fovea was observed in the patient with decreased visual acuity (20/60).

CONCLUSIONS: Optical coherence tomography demonstrated abnormalities in the outer foveal retina. The OCT findings suggest that decreased visual acuity may be associated with full-thickness involvement of the photoreceptors. (Am J Ophthalmol 2004;137:1139–1142. © 2004 by Elsevier Inc. All rights reserved.)

Solar retinopathy is characterized by visual distortion and a small yellow or red foveal lesion in patients with a history of sun gazing.¹⁻⁴ Fluorescein angiography may demonstrate leakage in the foveal region in the acute phase (hours to days) of the disease.^{1,2} In the latter phases of the disease, angiography may demonstrate transmission of fluorescence from the affected areas (window defects), but is often unremarkable.² Optically clear spaces within the fovea,² transient increase in foveal reflectivity,³ and reduced reflectivity from the retinal pigment epithelium⁴ have been described in solar retinop-

athy using first generation optical coherence tomography (OCT).²⁻⁴ The current study investigates the morphologic appearance by third generation OCT of the macula in patients with late solar retinopathy and its association with visual acuity.

Institutional review board approval for the study was obtained. All patients evaluated at the University of São Paulo Department of Ophthalmology with a diagnosis of solar retinopathy between 1998 and 2003 were invited to participate in a comprehensive examination including best-corrected Early Treatment Diabetic Retinopathy Study visual acuity, Amsler grid testing, fundus photography, fluorescein angiography, and OCT. Four of the six patients identified participated in the study (one patient could not be contacted, and the other was unable to travel to the clinic).

The study included four patients with visual symptoms and examination findings consistent with solar retinopathy in one eye (examination of the fellow eye was unremarkable) (Table 1). Optical coherence tomography abnormalities were similar and limited to the outer aspect of the foveal retina in all patients, but subtle morphologic peculiarities allowed differentiation of three patterns of abnormalities: 1) optically clear spaces within the entire photoreceptor reflective band (patient 1); 2) optically clear spaces at the level of the reflective band corresponding to photoreceptor outer segments with maintenance of reflective signal from photoreceptor inner segments (patients 2 and 3); and 3) fragmentation of the photoreceptor reflective layer with loss of the double high-reflective-layer pattern (patient 4). Involvement of the entire photorecep-

1140

AMERICAN JOURNAL OF OPHTHALMOLOGY

JUNE 2004

DOI 10.1007/s00417-004-0923-x

Yuko Wada Toshitaka Itabashi Hajime Sato Makoto Tamai

Clinical features of a Japanese family with autosomal dominant retinitis pigmentosa associated with a Thr494Met mutation in the *HPRP3* gene

Received: 7 October 2003 Revised: 1 March 2004 Accepted: 1 March 2004 Published online: 15 April 2004 © Springer-Verlag 2004

M. Tamai Department of Ophthalmology, Tohoku University School of Medicine, 1-1, Seiryo-machi, Aoba-ku, 980-77 Sendai, Japan e-mail: yukow@oph.med.tohoku.ac.jp

Tel.: +81-22-717-7294 Fax: +81-22-717-7298

Y. Wada (E) · T. Itabashi · H. Sato ·

Abstract Purpose: To determine the clinical features of a Japanese family with autosomal dominant retinitis pigmentosa (ADRP) associated with a Thr494Met mutation in the HPRP3 gene. Methods: Mutational screening by direct sequencing was performed on 96 unrelated patients with ADRP. The clinical features were determined by visual acuity, slit-lamp biomicroscopy, electroretinography, fluorescein angiography, and kinetic visual field testing. Results: A Thr494Met mutation in the HPRP3 gene was found in one family and it cosegregated with ADRP in the three affected members. The ophthalmic findings were those of typical retinitis pigmentosa with rapid progression after 40-years-ofage. One patient also had retinoblastoma as a child. Conclusion: We conclude that the Thr494Met mutation in the HPRP3 gene causes ADRP in Japanese patients. This mutation was found in 1% of patients with ADRP in Japan.

Introduction

Retinitis pigmentosa (RP) is an inherited retinal disease with considerable genetic heterogeneity; to date, 10 candidate genes have been identified for autosomal dominant retinitis pigmentosa (ADRP) [7]. In 2001, two groups reported that genes related to splicing factors, e.g., PRPF31 and PRPF8 genes, were candidate genes for RP11 and RP13, respectively [5, 8]. Several kinds of disease-causing mutations in the PRPF31 and PRPF8 genes have been identified in patients with ADRP.

The HPRP3 gene is the third candidate gene for ADRP that is related to the pre-mRNA splicing factor after the PRPF31 and PRPC8 genes [8]. The HPRP3 gene is located within the RP18 interval, which supported the suggestion that the HPRP3 gene was a candidate gene for RP18 mapped to chromosome 1q21.1.

In 2002, two kinds of pathogenic mutations in the HPRP3 gene, designated Thr494Met and Pro493Ser, were identified in patients with ADRP and simplex RP [1]. At present, the phenotypes associated with mutations in the HPRP3 gene in patients with ADRP have not been reported.

We have characterized the clinical features of Japanese patients associated with the Thr494 Met mutation in the HPRP3 gene.

Methods

Subjects and mutation analysis

We screened genomic DNA samples from 96 unrelated patients with ADRP for mutations of the HPRP3 gene. Genomic DNA was isolated from leukocytes prepared from each patient's blood (10-15 ml). Informed consent was obtained from all patients before their entry into this study.

The sequence from exon 1 to exon 16 of the HPRP3 gene was amplified by polymerase chain reaction. For screenings, 16 sets of oligonucleotide primer pairs were used from the genomic sequence of the HPRP3 gene. The PCR products were sequenced directly in the forward and reverse directions on an ABI sequencer (model 3100; Applied Biosystems, Foster City, CA). We further screened our patients for mutations in the peripherin/RDS, rhodopsin, RP1, NRL, FSCN2, PRPF31, PRPF8, and IMPDH1 genes. The members of one pedigree, who were identified as having a Thr494Met mutation, became the focus of this study (Fig. 1).

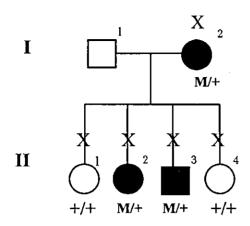


Fig. 1 Pedigree of a Japanese family with ADRP associated with the Thr494Met mutation in the HPRP3 gene showing affected (solid symbols) and unaffected (open symbols) members. Squares male members, circles female members, X individuals examined in this study, slash deceased, arrow proband, M mutant allele, + normal allele

Clinical examination

We examined three affected and two non-affected members (Fig. 1) of our family. The ophthalmic examination included best-corrected visual acuity, slit-lamp biomicroscopy, kinetic visual field examination, fundus examination, fluorescein angiography (FA), and electroretinography (ERG). Ophthalmoscopic findings were recorded by color fundus photography. Kinetic visual field examination was performed on a Goldmann perimeter with the V-4-e, IV-4-e, I-4-e, I-3-e, and I-2-e targets.

The ERGs were recorded under conditions that conformed to the standards of the International Society of Clinical Electrophysiology of Vision [3]. The photopic ERGs were elicited by a single flash or a 30 Hz flickering red light under light-adapted conditions. Rod-isolated responses were elicited by a dim blue flash under dark-adapted conditions (30 min in the dark). A bright white flash (20 J) in the dark-adapted state was used to elicit the mixed rod-cone response.

Results

DNA analysis

The three affected members with ADRP (Fig. 1) were found to have a Thr494Met mutation in the *HPRP3* gene. The abnormal nucleotide sequence was a transversion of cytosine to thymine in the second nucleotide at codon 494 (Fig. 2). This alteration caused an amino acid substitution of a threonine residue, resulting in a methionine at codon 494. The non-affected members did not have this mutation, and this mutation cosegregated with the phenotype of this Japanese family. No mutation was detected in the *peripherin/RDS*, *rhodopsin*, *RP1*, *NRL*, *FSCN2*, *PRPF31*, *PRPF8*, and *IMPDH1* genes.

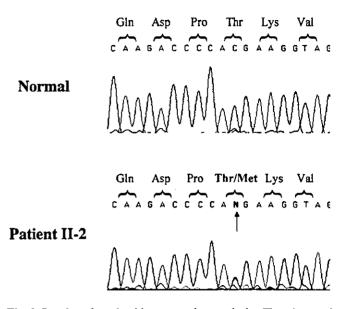


Fig. 2 Results of nucleotide sequencing analysis. The abnormal nucleotide sequence of patient II-2 was a heterozygous transversion of cytosine to thymine in the second nucleotide at codon 494

Case reports

Case 1

Patient I-2 was a 48-year-old woman, the proband, who noted a decrease in visual acuity, night blindness, and constricted visual field when she was 15 years old. She was diagnosed as having retinitis pigmentosa by a local ophthalmologist at that time. She reported that her visual acuity and visual field became worse after age 40 years. In 2003, her visual acuity was hand motion in both eyes. Slit-lamp biomicroscopy disclosed normal-appearing cornea, anterior chamber, iris, and lens in both eyes.

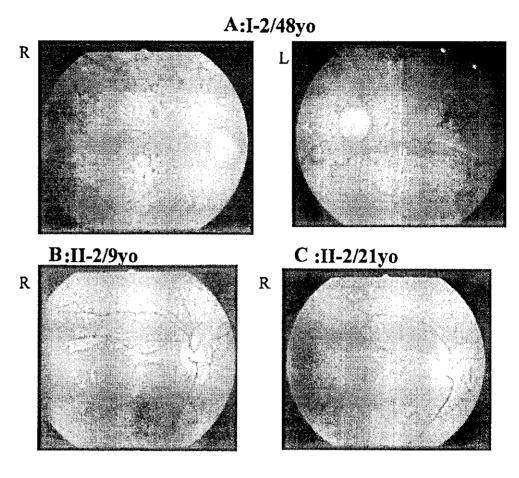
Fundus examination showed severe attenuation of the retinal vessels, bone spicule pigmentation, mottled appearance of the retinal pigment epithelium, and chorioretinal atrophy, bilaterally (Fig. 3a). FA disclosed hypofluorescence corresponding to the chorioretinal atrophy, and hyperfluorescence in the posterior pole (Fig. 4a).

The scotopic, photopic, bright flash, and 30-Hz flicker ERGs were non-recordable. Kinetic visual field testing showed severe constriction of the visual fields with the V-4-e, IV-4-e, and III-4-e targets (Fig. 5a).

Case 2

Patient II-2 was the 21-year-old daughter of patient I-2. When she was 2 years old, she was diagnosed with retinoblastoma in the left eye, and the eye was enucleated. The ophthalmologic examination disclosed that she also had retinitis pigmentosa.

Fig. 3 A Fundus photographs of patient I-2. Severe attenuation of retinal vessels, atrophy of the retinal pigment epithelium, and chorioretinal atrophy can be seen. B Fundus photograph of patient II-2 at age 9 years showing a mottled appearance of the retinal pigment epithelium and mild attenuation of the retinal vessels. C Fundus photograph of patient II-1 at age 21 years. No remarkable change can be seen



Her visual acuity at age 21 years was 0.9 in the right eye. Slit-lamp biomicroscopic examination showed normal-appearing cornea, anterior chamber, iris, lens, and vitreous. Fundus examination showed mild attenuation of the retinal vessels and a mottled appearance of the retinal pigment epithelium. A comparison of fundus photographs at ages 9 years and 21 years indicated that no remarkable progression occurred during this 12-year period (Fig. 3b,c). FA disclosed granular hyperfluorescence from the posterior pole to the peripheral area (Fig. 4b).

Her scotopic, photopic, bright flash, and 30-Hz flicker ERGs were non-recordable. Kinetic visual field testing disclosed a constricted visual field and a paracentral scotoma with the I-4-e, I-3-e, and I-2-e targets (Fig. 5b).

Case 3

Patient II-3 was the 19-year-old son of patient I-2. He noticed that he had poor night vision when he was 7 years old. As his mother and his elder sister (patient II-2) were diagnosed as having retinitis pigmentosa in our clinic, he also visited our clinic at 7 years of age. His best-corrected visual acuity was 0.4 with -5.75 to $3.5 \times 160^{\circ}$ OD and 0.4 with -5.25 to $3.0 \times 180^{\circ}$ OS. Slit-lamp biomicroscopic

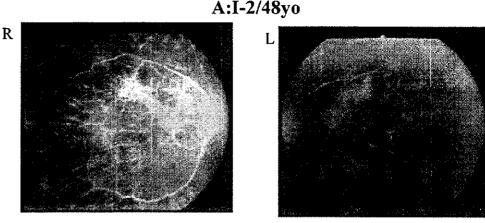
findings of the cornea, anterior chamber, iris, and lens were normal in both eyes. Fundus examination disclosed a mottled appearance of the retinal pigment epithelium, mild attenuation of retinal vessels, and bone spicule pigmentation, bilaterally.

Discussion

The *HPRP3* gene encodes the U4/U6 snRNP-associated splicing factor, Hprp3p, has 16 exons, and is located on chromosome 1q21.1. Hprp3p is a 77-kDa protein that interacts with Hprp4p and plays an important role in RNA splicing [2,10]. At present, two mutations, designated Thr494Met and Pro493Ser, have been reported in the *HPRP3* gene. These two codons are highly conserved and are located at the C-terminal region of the protein. They have been considered to play a role in the binding of Hprp3p with Hprp4p [4]. The Thr494Met mutation is considered to be a common mutation in the *HPRP3* gene because it has also been found in English, Danish, and Spanish families [1].

Chakarova et al. reported two different haplotypes of the Thr494Met mutation in the *HPRP3* gene that coseg-

Fig. 4 A Fluorescein angiograms of patient I-2. Hypofluorescence corresponding to the chorioretinal atrophy can be seen. B Fluorescein angiogram of patient II-2 shows the granular hyperfluorescence in the posterior pole



B:II-2/21yo

regated with ADRP in English and Danish families [1], as it did in our Japanese family.

Previous studies on the phenotype-genotype correlation of inherited retinal degeneration in the Japanese population demonstrated that Japanese patients had unique mutations. Thus, the 1147delA mutation in the arrestin gene and the 208delG mutation in the FSCN2 gene have been found only in Japanese patients [6, 11]. On the other hand, the Pro23His and Pro347Leu mutations in the *rhodopsin* gene and the Arg677X mutation in the *RP1* gene are the most common mutations for ADRP in the United States, and yet Japanese patients with ADRP rarely have these mutations. These findings suggested that the type and frequency of mutations depend on the ethnic population.

To date, there is only one clinical report on patients with the Thr494Met mutation, and that in Spanish patients. The findings were late onset and a less severe phenotype than the ADRP patients with mutations in the *PRPF8* and *PRPF31* genes [4].

In general, our patients noted visual disturbances and were diagnosed with RP from the first decade of life, but the severe clinical features did not develop until after 40 years of age.

In conclusion, we have identified a Thr494 Met mutation in 1% of patients with ADRP, which suggests that this mutation might be relatively rare in Japanese patients with ADRP. Additional families with ADRP are being screened for this mutation to ascertain the phenotypegenotype correlation and to identify the haplotype of the HPRP3 gene in the Japanese population.

Acknowledgements This study was supported in part by a grant from the Research Committee on Chorioretinal Degenerations and Optic Atrophy, the Ministry of Health, Labour and Welfare of the Japanese Government (Dr. Ishibashi), Tokyo, Japan, and a Grant-In-Aid for Scientific Research from the Ministry of Education, Science, and Culture of the Japanese Government (Dr. Wada, A-14704044), Tokyo, Japan.

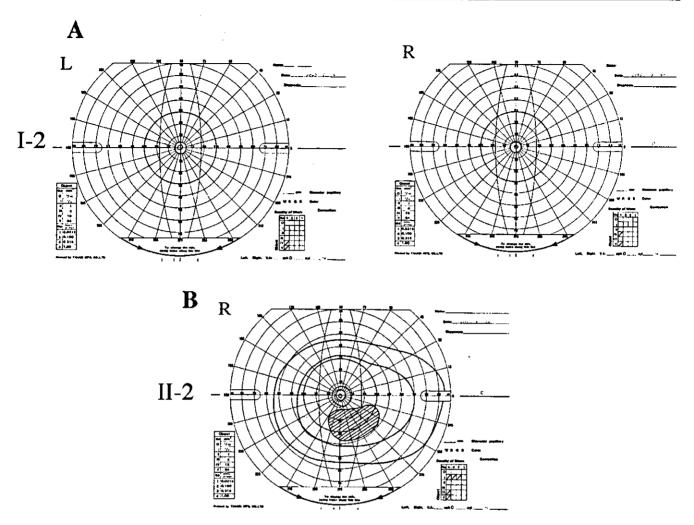


Fig. 5 Results of Goldmann visual field testing of patient I-2 (A) and patient II-2 (B). Patient I-2 shows constricted visual field with V-4-e, IV-4-e, and III-4-e targets. Patient II-2 shows constricted

visual field and paracentral scotoma with I-4-e, I-3-e, and I-2-e targets. L Left eye, R right eye

References

- Chakarova CF, Hims MM, Bolz H, et al (2002) Mutations in HPRP3, a third member of pre-mRNA splicing factor genes, implicated in autosomal dominant retinitis pigmentosa. Hum Mol Genet 11:87-92
- Gonzalez-Santos JM, Wang A, Jones J, et al (2002) Central region of the human splicing factor Hprp3p interacts with Hprp4p. J Biol Chem 277:23764-23772
- Marmor MF, Arden GB, Nilson SEG, Zrenner E (1989) Standard for clinical electroretinography. Arch Ophthalmol 107:816–819
- Martinez-Gimeno M, Gamundi MJ, Hernan I, Maseras M, et al (2003) Mutations in the pre-mRNA splicingfactor genes PRPF3, PRPF8, and PRPF31 in Spanish families with autosomal dominant retinitis pigmentosa. Invest Ophthalmol Vis Sci 44:2171– 2177
- McKie AB, McHale JC, Keen TJ, et al (2001) Mutations in the pre-mRNA splicing factor gene PRPC8 in autosomal dominant retinitis pigmentosa (RP13). Hum Mol Genet 10:1555– 1562
- Nakazawa M, Wada Y, Fuchs S, Gal A, and Tamai M (1997) Oguchi disease: phenotypic characteristics of patients with the frequent 1147delA mutation in the arrestin gene. Retina 17:17-22
- RetNet (2003) Available athttp:// www.sph.uth.tmc.edu/Retnet/disease.htm. Accessed 14 May 2003
- 8. Vithana EN, Abu-Safieh L, Allen MJ, et al (2001) A human homolog of yeast pre-mRNA splicing gene, PRP31, underlies autosomal dominant retinitis pigmentosa on chromosome 19q13.4 (RP11). Mol Cell 8:375-381

- Wada Y, Nakazawa M, and Tamai M (1997) A patient with progressive retinal degeneration associated with homozygous 1147delA mutation in the arrestin gene. In: LaVail M, Anderson R, Hollyfield J (eds) Degenerative retina diseases. Plenum, New York, pp 319-322
- Wang A, Forman-Kay J, Luo Y, et al (1997) Identification and characterization of human genes encoding Hprp3p and Hprp4p, interacting components of the spliceosome. Hum Mol Genet 6:2117-2126
- 11. Wada Y, Abe T, Takeshita T, Sato T, Tamai M (2001) Mutation of human retinal fascin gene (FSCN2) causes autosomal dominant retinitis pigmentosa. Invest Ophthalmol Vis Sci 42:2395-2410